

Title	郭沫若『女神』論：郭沫若の近代思想受容を中心に
Author(s)	賈, 笑寒
Citation	大阪大学, 2004, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/58771
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について <a>〉 をご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏名	賈笑寒
本籍(国籍)	
学位の種類	博士(言語文化学)
学位記番号	甲第36号
学位授与年月日	平成16年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 課程博士
研究科及び専攻	言語社会研究科言語社会専攻
学位論文題目	郭沫若『女神』論—郭沫若の近代思想受容を中心に—
論文審査委員	主査 教授 青野繁治 副査 教授 武藤洋二 副査 教授 杉村博文 副査 教授 尾上新太郎 副査 教授 渡邊克昭

論文の内容要旨

郭沫若の最初の戯曲詩歌集『女神』が上海泰東図書局によって出版されたのは1921年8月15日のことである。『女神』は出版直後に20世紀の時代精神を表現した作品として注目され、現在では、中国近代文学及び口語自由詩の歴史において未曾有の新境地を開いた記念碑的存在として評価されている。『女神』に収められている3篇の戯曲と61篇の詩は、郭沫若が日本留学中、岡山第六高等学校2年(1916年)から九州帝国大学医学部4年(1921年)までに書いた作品である。

もともと郭沫若は文学を勉強するためではなく、「富国強兵」のために西洋近代の新しい科学技術を身につけようとして日本に渡り、国家、社会に確実に貢献しようと思って医学を学んだのである。結果的に、彼は日本で受けた近代教育をとおして西洋近代思想、近代文学に接し、文学創作の道を歩むようになった。郭沫若の西洋近代思想、近代文学受容の問題は、『女神』の成立にもかかわる重要な問題であるといえる。本論では、具体的な作品の分析をとおして、『女神』を書いた時期に、郭沫若がどんな思想、どんな人物から影響を受けたか、西洋近代思想に対する彼の受け止め方がいかなるものであったかを考察することを目的とする。

戯曲「女神之再生」には、戦乱に蝕まれていた中国の再生と、女神が象徴する民主、平和、平等の精神の復興という二つの再生が描かれている。「女神之再生」の冒頭に、ゲーテの『ファウスト』終末の「神秘の合唱」が引用されているが、そのなかにある「永遠にして女性的なるもの」はファウストを救済する「生命循環」、「永遠の愛」の象徴として考えられているが、郭沫若はそれを「永遠の女性」と訳し、慈愛寛恕、民主平和の精神の象徴として理解した。彼が『ファウスト』の「永遠の女性」のイメージに合わせ中国神話上の女神女媧を「女神」に変身させて「女神之再生」を書いたのは、中国の再生のために、女

神が象徴する民主平和の精神を復興すべきであると訴えるためであったのである。

戯曲「湘累」には、中国戦国時代の詩人屈原の濁り切った世の中に対する憤慨、世の中に容れられないことによってもたらされた悲痛と孤独感、さらに、自我を最大限に肯定し、けっして汚濁に汚されずに潔さを保とうとする決意が描かれている。郭沫若は「湘累」は精神病理学に基づいて屈原を観察したものであると述べているが、彼が「湘累」を書いた動機は、当時の彼が受けた様々な精神的抑圧を訴え、自由に自分を表現したいという文学に対する抱負をあらわすことにあるのである。

戯曲「棠棣之花」のなかで、郭沫若は私有制度を世の中を乱した根本的な原因として批判した。「棠棣之花」の私有制度批判について、従来では、プロレタリアの指導下にいた革命的民主主義者郭沫若の革命意志のあらわれであると論じられてきたが、郭沫若自身も認めているように、「棠棣之花」はアナキズムの色彩を濃厚に帯びている作品である。この作品にある強権をたたきふせる主張、および同じ時期に書いた「棠棣之花第二幕」にあらわれている、君主制を廃棄して、民衆のなかから賢者を起用すべきという主張は、権力の否定というアナキズムの思想に一致するものである。

『女神』のなかで、「女神之再生」、「湘累」、「棠棣之花」の3篇の戯曲は第1輯を占めているが、第2輯、第3輯には60篇の詩が収められている。執筆の順を追って、詩風の変化にしたがってこれらの詩の創作を三つの段階に分けることができる。この三つの段階を経て、郭沫若の詩は男女の情愛や悲哀、憂愁を表現するスタティックなものから、個性の主張や生命力の高揚などの理想主義的な感慨を謳うダイナミックなものに変身して、また感情の抑制がみられるスタティックなものに回帰したのである。詩の特色において、第1期と第3期が極めて近く、これに対し、第2期は特異な存在である。

詩風の変化に大きくかかわっていたのは、郭沫若がタゴールの詩とホイットマンの『草の葉』から受けた影響である。郭沫若の口語自由詩の詩形はタゴールの詩を通じて確立されたものであるが、ホイットマンの『草の葉』との出会いは、一時的に郭沫若の詩風を変えた決定的なきっかけであった。彼は、ホイットマンの一切の古いしきたりから抜けきった詩風は五四時代の疾風怒濤の精神と非常に調子が合うと考えて、ホイットマンの雄壮で、豪放で朗々とした調子に動かされ、感情を高めるリズムを有する詩を書くようになったのである。

序詩、戯曲3篇と詩60篇からなる『女神』であるが、その根底に流れているのは汎神論の思想であると考えられている。郭沫若の汎神論思想は彼が日本で近代教育を受ける過程で形成されたものであるが、西洋の汎神論思想をそのまま受け容れたものではなく、それには主に、自我の拡張、ポジティブな反抗精神、博愛の精神という三つの内容がある。郭沫若は、封建的諸関係に対する反抗と、個人の尊厳と価値を重要視するという、新文化運動と大正デモクラシーの間に共通する時代思潮の影響を受け、様々な心理的葛藤を克服し、

ありのままの自我を受け容れようとして彼独自の汎神論的思想を確立したのである。

当時の中国は、封建的旧制度、旧文化の束縛を打破するために新しい精神が求められ、変革の気運がもっとも高まった時代であった。日本留学中の郭沫若も中華民族の復興を強く願って、中国の再生に必要なダイナミックなポジティブ精神、反抗精神、近代科学精神、世界と一体化する精神、暗い現実から明るい未来へ転換する精神を求めている。『女神』を成功に導いたのは、時代精神をもっとも重視するという郭沫若の姿勢であったといえよう。

郭沫若は西洋近代の文明と精神を中国の近代化に不可欠なものであるとみて高く評価し、それに強く憧れる一方、意識的に民族性を重視しており、新しい文化を確立しようとする際に、国民的情緒を重視せずに、ただ外国人の言論を紹介したり、個人の非科学的な考えを发表或しするだけでは、結局食い違つてうまく適合しないと考えていた。『女神』には屈原、聶政、蘇武、莊子など、中国で有名な歴史人物が登場しており、中国人によく知られる共工と顓頊の神話（「女神の再生」）、鳳凰涅槃（「鳳凰涅槃」）、天狗（「天狗」）などの伝説が題材として使われていることからみられるように、郭沫若は伝統文化のなかに西洋の近代思想を受け容れる土壌が十分にあると認識していた。

また、郭沫若の汎神論の確立において、中国古代の莊子、孔子、王陽明の思想からスピノザやゲーテの汎神論思想に共通する部分を見つけ出すことはその不可欠な一環であったことが物語っているように、彼は西洋近代思想を受容する際に、共感を得た部分を既存の民族文化及び国の現状と照らし合わせ選択的に受け入れようとしたのである。

しかし、「女神之再生」からも読み取れるように、郭沫若には、時代精神を重視するあまり、無理に文学作品からそれに合致するようなものを読み取ろうとする傾向があった。彼の偏った『ファウスト』理解は、彼が中国の変革に対するみずからの情熱と希望を『ファウスト』に投影しながら『ファウスト』を受容していたためにできあがったものである。

郭沫若は、医学の勉強にまったく興味を失った理由を難聴、すなわち打診や聴診など基本的医術をききわけることができないことにしている。しかし、なぜ彼が医学を止め、難聴が障害にならないほかの「実学」に換えようとしたのではなく、留学当初意識して避けようとした「文学」の道を選ぼうとしたのであろうか。また、現に彼は耳の障害を克服し、1923年に医学士の学位をとって九州帝国大学を卒業した。なぜ彼がその後にも、医者として生きていく可能性を自ら放棄し、文学の道を選んだのであろうか。

九州帝国大学に入学する直前の郭沫若が友人に「ぼくらは自然科学を研究しているが」、「これはただぼくらに外界の自然を観察することを教えるだけなんだ。ぼくはぼくらの内部から湧いて来るものを、創作として出したいんだ」と語った言葉からもうかがえるように、大学に入学する前から、郭沫若の関心はすでに人間の外部を観察する自然科学より、人間の精神を表現する文学に傾いていたのである。

郭沫若にとって、文学は自由に自分の内部から湧いてくるものを表現できる分野であつ

た。もちろん、中華民族の再生と中国の近代化がもっとも緊要な課題であった当時のような時代では、彼は「文学」の「実学」にまさる社会的役割も意識していた。しかし、『女神』にあらわれているように、彼の表現したかったものには、いかにすれば中国の近代化が実現できるかというモチーフが存在している一方、彼がもっとも重視していた課題は、新しい精神の創造である。彼が自らの文学団体に「創造社」と名付けたのもそのあらわれの一つであるといえよう。

中国人留学生の文学団体創造社は、ちょうど『女神』ができあがった頃に、郭沫若の奔走のもとに東京で発足した。『女神』をとおして実際に自我を表現することができ、また、『女神』の成功によって文学の道を歩む自信を得たと同時に、文学の実学より上回る社会的影響力をさらに認識できたことは、郭沫若の文学への方向転換を加速させたといえよう。この意味では、20世紀の時代精神をつかんだ名作として評される郭沫若の『女神』は、近代中国の夜明けの時代に、中国より一足早く近代化の道を進んだ日本で医学生から文学者へと転身する郭沫若の成長の記録でもあるのである。

論文審査の結果の要旨

郭沫若（1882-1978）の処女作品集『女神』は、中国の口語自由詩の歴史において、大きな影響力をもった最初の新詩集として高く評価されてきているが、本論文は従来の『女神』評価が“主に愛国主義、浪漫主義、時代精神などの角度からこの作品を把握しており、”“西洋文学のロマン主義伝統を継承した”、“タゴール、シェリー、ハイネ、ゲーテ、ホイットマンの影響を受けた”というふうに触れているだけで、“具体的な論述も不十分である”という認識にたち、“『女神』の初版本をもとに、具体的な作品の分析をとおして、『女神』を書いた時期に、郭沫若がどんな思想、どんな人物から影響を受けたか、西洋近代思想に対する彼の受け止め方がいかなるものであったかを考察する”ものである。

第1章では、『女神』の「序詩」に続く最初の戯曲作品「女神之再生」の冒頭に『ファウスト』の最後の「神秘の合唱」が引用されていることに注目し、郭沫若が森鷗外の日本語訳によりながら、そのなかの「永遠に女性なるもの」を「永遠の女性」と解釈し、民主平和の象徴としての「永遠の女性」＝女神に、中国の伝統的な女神である女媧を重ね合わせ、五色の石を練って天の裂け目を補った人頭蛇身の女媧を、人間の女性と同じ裸体をもった女神として描き出し、中国を救済できるのが民主平和の精神しかないという考えを訴えるためだったとする。

第2章は、中国古代の宰相であり詩人でもあった屈原を題材にした戯曲「湘累」を論じている。従来の『女神』論は、「円満な性格」で「心に愁いを帯びているが、反抗と創造を絶対に放棄しない自由奔放な戦士たる」屈原像を描いたものとして論じているが、本論文は、郭沫若自身が友人に宛てて「精神病理学に基づいて屈原を観察した」ものである、と書いていることに注目し、独自の論旨を展開する。作中の屈原が古代の君主舜であると錯覚し、起伏の激しい異常な精神状態に陥っていること、そしてその屈原の焦燥感が性欲動の抑圧からくるものであると、精神分析に関心をもっていた郭沫若が考えていたこと、そのような屈原の心理は、実は祖国に妻を持つ身でありながら、日本人女性と結ばれて子をなした私生活と、難聴をかかえて医学生としての限界に悩んでもいた郭

沫若自身の姿を描いていたものであったこと、などを指摘している。

第3章は、一幕劇「棠棣之花」をとりあげ、1937年に書いた5幕劇『棠棣之花』との相違点を明らかにしつつ、1920年前後における郭沫若の思想的特長と一幕劇「棠棣之花」に表れたアナキズム思想について論じている。『史記』の「刺客列伝」に基づくテロリスト聶政と双子の姉聶嬰の会話のなかにあられる「強権をたたきふせる主張」「君主制を廃棄して民衆のなかから賢者を起用すべきという主張」が「権力の否定というアナキズムの思想に一致する」と指摘しつつ、中国では改良派によって、ナロードニキによるテロリズムがアナキズムと同義に解釈され紹介されていたこと、『浙江潮』という留学生の刊行物にアナキズム紹介の論文が掲載されていたことなどが、郭沫若に影響を与えたとしている。興味深い事実をいくつか指摘しているが、郭沫若自身のアナキズムがどれほど内面化されていたかの分析が十分ではなくやや物足りない。

第4章は、『女神』に収められている60篇の詩に関して、これらをスタティック、ダイナミック、スタティックな三つの段階に分けられる、とし、その詩風の変化は、それぞれ「感情を沈める」スタティックなタゴール、「感情を高めるリズム」をもったダイナミックなホイットマンの影響であり、最後はファウストと出会った結果である、ということを詩の作風から位置づける。聞一多が『女神』を評して、時代精神の産物である、と指摘したのは、ダイナミックなホイットマンの影響を受けた部分であった

第5章では、郭沫若の汎神論について考察している。朱自清が郭沫若の詩を評して、「中国の伝統のなかにはない」ものとして汎神論を挙げているのに対して、郭沫若が挙げる汎神論者のなかには、孔子、荘子、王陽明がいることを指摘しつつ、タゴールの「梵我一如」、孔子の動的精神と個性の主張、荘子の「道即我」、王陽明の「心即理」、ゲーテの「我は即ち神である」、いずれもスピノザの「神即自然」と通ずるものとして捉えられていたことを指摘している。また郭沫若の汎神論の内容を、「自我の拡張」「ポジティブな反抗精神」「博愛の精神」という三つの内容があることを指摘し、聞一多の指摘する時代精神、すなわち「ダイナミックなポジティブ精神」「反抗精神」「近代科学精神」「世界と一体化する精神」「暗い現実から明るい未来への転換」が、郭沫若の汎神論からだけでなく、郭が日本で過ごした時代、すなわち大正時代が関係することを、檜山久雄、伊藤虎丸らの研究をもとに指摘する。

「総括」では、『女神』の創作が、医学生として学びながら、文学表現への情熱に突き動かされる郭沫若自身の自我を表現する手段として獲得する過程でもあった、ととらえ、「中国よりもはや近代化の道を歩んだ日本で医学生から文学者へと転進する郭沫若の成長の記録でもある」と結論づけた。

以上のように、本論文は、過去の『女神』を論じた先行研究に不足していた具体的な論点の分析を一步進めるものであったといえる。これによって、郭沫若の『女神』がその時代にとって、どのような意味をもったのかが明らかになったとすることができよう。しかし、例えばホイットマンからの影響関係については、周辺的な事柄が指摘されているだけで、具体的な作品テキストからの引用がなく、説得力を弱めているし、また詩のリズムの変化と現実の関係も明確でない点で、論文としての物足りなさを感じる。

思想が本人の願望実現の正当化の手段として使われることもあり、この手段としての思想、という観点を膨らませると更に説得的な展開が可能であると思われる。

しかしながら論旨は明解であり、先行論文の見解を鋭く批判しつつ妥当な自説を展開している。郭沫若の『女神』に関する研究は、中国でも日本でも『女神』を詩集として扱ったことによる限界をもっていたが、本論文は『女神』を「戯曲・詩集」と把握することによって、より全面的に『女

神』を評価する道を開いたのである。以上のことから判断して、本論文は博士の学位を授与するに値する論文であると判断する。